



芳川俊雄関
岡本勘造終
櫻齋房種画

東京奇聞

初編下

初編中

初編上

2690
3

2690
2

2690
1





其名の高橋
毒婦の小傳
東京奇聞

初編上

へ14
2690
1



14
2690
1

其名も高橋

毒婦小傳

東京奇聞

初編上之巻

芳川俊雄閱

岡本勘造綴

櫻齋房種畫

島鮮堂壽梓



東京新聞

兼て悪事小其名も高橋於傳が履歴の既小府下の諸新聞にも委敷
出で我東京新聞の第五百八号(本月一日)小其發端を掲げて漸く其
成長を示し号を逐て今日も半小至り此塩梅でこれに續く有りと
筆を横啣へはて考て之を所へ書肆島鮮堂の主人が來て謂らく
何卒アこれの水、本にして下さの随分モ、儲りませとおどの
至極暖たふ相談み成りど新聞紙の散逸しやすく連續したる傳
紀の切々として讀んでこれの之を冊子に綴りたるにして挿繪を加へる
るのち記者の丹誠も永く朽ちざる梓を留り其上幾許の暖くあると
こ岡本子をおびておんで漸く爰迄打つていふが甘いと辛みせり
夜延仕事の急拵へとうり餘り沢山の味噌をつけぬ様よと云ふ

明治十二年二月下旬

芳川俊雄誌



く専刀



黒瀬右衛門の妻
幾野



沼田藩近習役
原田要



軍治の妹
伝



沼田藩の家老
黒瀬勘右門

勘右門の長男
黒瀬軍治



おんの妻
高橋波之助

於傳の美良文
高橋九右衛門

發端 四方の民は住まざる徳川の政事にて
 信する園八州の代由登るる上孫の沼田にて
 三万五千石を領したる高橋波之助の名家
 老小兼淑勳の徳と云々あり縁多し而も
 受領して文武の道あり勝つべし
 一藩の政事仕任ト人ももる故せし
 是しが妻の
 一家中の内由二人とあはしとの
 野の夫人とわが家淑勳氏の果報也
 名と又入るもと後やぬれり
 夫婦の間は二人の子あり長男は軍治
 との以妹とお借と名つみて學中の五と
 愛のつじと有腰まき
 年々加敷
 改まる
 丑の春
 今更え



おつとくおまはらぬおまはらぬおまはらぬ
 おつとくおまはらぬおまはらぬおまはらぬ
 おつとくおまはらぬおまはらぬおまはらぬ
 おつとくおまはらぬおまはらぬおまはらぬ

鮮やうとやに
 ありて五軍中
 女小のあや
 女小のあや
 女小のあや
 女小のあや

女小のあや



供を便じて也...
 ひそめあふはも
 かなとあはしつる
 例さればは涙ももはなれ一通を
 女小のあやより互ひあはれも身倍
 あはれつるてもあはれい必要も今更

女小のあや
 女小のあや
 女小のあや
 女小のあや
 女小のあや
 女小のあや

女小のあや



つぎ 惚てあいのき 勘おまの窟へお羨やぬい 移つては又
 何とぞの宅の末の娘より地その妻ぬい又捨る 諸も甘い由
 原細やわがうアハまな人きじぬがト 縁よりよせると
 我時困う小唄へ七也アア 要柿とあき事 諸母を
 捕へて水懐液をうるとどう心なごか居その水き 嫌オ、
 きがつらんどか不ぬお能くこの後きふお居柿と一ツ
 とまじ鳴ーや女お運ぶすき 信の翁を自うる
 かねて居その雛子とや女へ 涙と
 おぬとせいと云付るおんをせ
 立せぬけ 畧
 と都々あき
 と 齒の下女
 りそくサア 要換おめ

おしく 爲るきりなる 丸根
 小あましくうけて 要の飲
 不し 翁より 海へお敵で
 戴、お前へ 那地へアレ
 防ちんがゆてと ざるト
 下女と 隙々 逃れ以
 要ハ花杯と
 ざんおのせ



の 換る
 何 甲
 婚 ぬ
 の 杯
 戴
 三 廻
 の 杯
 下 更
 戴
 何 甲
 婚 ぬ
 の 換る



とし小からんご様
 まひけとのふと柳の愛
 て居るしも假
 まの素
 款
 西
 長けくふぬと



方作
 藤士の内でも
 親く受る中
 後者の
 唇とよ一
 面用と尖
 此れハ
 一団の怒り

つぎ人の目小からぬ横小尻度せしむる後わらうまうる。
 鉄面皮今日由るゆきて破れ捨れ鬼やから桃むい珍らしうねと
 年の娘め小舞らうくとあつて態と愛おしく取扱ふとまふ
 晴れを幾時ぞ登つて和じきあるはひひおゆのふん放
 ちんんと抱きまてつぎ己惚ふ要いゆし
 めく幾時が削へるまふ
 年いごうくも幸
 子男のまうに
 つるそれと云ぬ
 ありのいあきまう
 さい女中へ返羽板小着中
 あつてあの強き羽いふを尾い又とあつ
 借もまぬるに一つ一才田はのあつと



後との内お封
 の候めて度せしむ
 由りの上とせしむ
 あり知何ふお悪い
 方どとて道と
 不道い合らうと
 あいさん見せし出
 世とあつる身と
 及ふ遠ろ市好
 仕めしゆ死
 人の身と
 入らぬ道
 習假由

もいしてと幾時のもことりうらまを根り
 かまらば振舞ふ幾時のもことり
 懐へるいせよとともいひま
 ありて
 威後とつ
 ろひを乳で
 なる要どの
 先頭ゆらう申
 さうとあひの世が
 室内の改らある
 事りやあらんとその
 修よりお掛あけがの
 奉とらあるひあふ



次へ
 再び
 うら
 ささ
 世とあつる身と
 及ふ遠ろ市好
 仕めしゆ死
 人の身と
 入らぬ道
 習假由

つぎまされまばふし由々まじし今日ハ西居其難の酒機
 嫌ひまのんの戦むとさびかきり小のこころんちど小
 了くお帰すまされまじし流石の家老の内室よりあ
 わらうま強美見たるあむむて要ハ大おんをまが
 外は赤面を世と碎ひまきり何と養もあむあめ
 年の始めあかきまめに大和かきり西向すと
 又永日の暇もさすひひみて逃るが如く
 かわりたるま後ハ解り道
 出入りせは偶不來も必あ
 かろうとやらゝれまふとまき
 まふ我世の窓
 うふし改むと
 まふのまじ



田舎家の

○嘆きまされまばふし由々まじし今日ハ西居其難の酒機
 嫌ひまのんの戦むとさびかきり小のこころんちど小
 了くお帰すまされまじし流石の家老の内室よりあ
 わらうま強美見たるあむむて要ハ大おんをまが
 外は赤面を世と碎ひまきり何と養もあむあめ
 年の始めあかきまめに大和かきり西向すと
 又永日の暇もさすひひみて逃るが如く
 かわりたるま後ハ解り道
 出入りせは偶不來も必あ
 かろうとやらゝれまふとまき
 まふ我世の窓
 うふし改むと
 まふのまじ

○僅う株下とまされ
 ての糸及びかつる



起し中
巻のあ

○嘆きまされまばふし由々まじし今日ハ西居其難の酒機
 嫌ひまのんの戦むとさびかきり小のこころんちど小
 了くお帰すまされまじし流石の家老の内室よりあ
 わらうま強美見たるあむむて要ハ大おんをまが
 外は赤面を世と碎ひまきり何と養もあむあめ
 年の始めあかきまめに大和かきり西向すと
 又永日の暇もさすひひみて逃るが如く
 かわりたるま後ハ解り道
 出入りせは偶不來も必あ
 かろうとやらゝれまふとまき
 まふ我世の窓
 うふし改むと
 まふのまじ



龜錦繪問屋

東京區五反町十二番地
岡本勘造
出版人 網島龜吉

大功記銘々傳四冊 新板双六類品

御所櫻梅松録十齣 仇優忠臣藏折本

珍寶々部々一冊 牙五扁 粉色八小本數品

命之養生善惡鏡全 島田郎梅雨日記 大五編 大尾

東京區分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊 大尾切



湯浴して
おろ下女
お手小籠
徳川の湯治場
過るはる遠るはる
幼少弟の妻我れあく

強く
今
病
櫻
日次

方傳

十





初編中

14
2690
2



へ14
2690
2

東京新聞初編

中の巻

芳川俊雄閣

園本勅造撰

横高所繪画

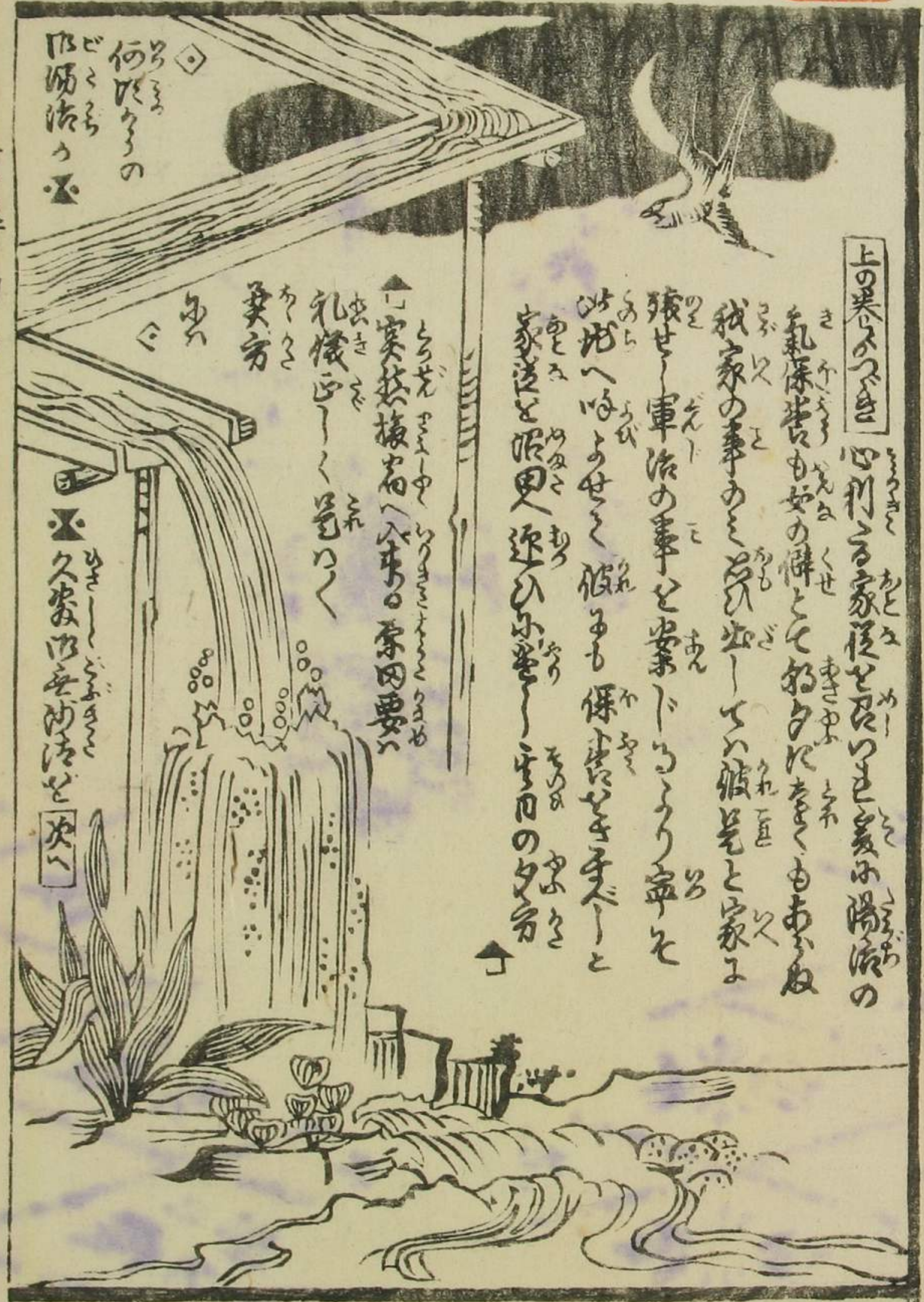
介の喜



鳥解

文彦

東京新聞



上の巻のつぎ

心利なる家後と及のさるる湯液の
氣保書も女の癖とて知られざるもあはぬ
我家の事のみを以てしつゝ彼等と家子
張せし軍治の事と案トつゝうり事と
此地へはよせと彼も保し書を手にしと
家道と眼更に近ひふ事しそ日の夕方

案然極者へ入る。原田要の

礼儀正しく是れ

美方

何れかの
比喩法

久安の書抄法を次へ



芥子園画傳



△ 雨の降りしき
△ 衣を脱ぎ
△ 入用の
△ 雨具
△ 取り出し

△ 打ち声一まと
△ 打ち声一まと

た専切中

のぞくの
おのかを
とありしと入で
のそとを
ときいて



△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは

△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは
△ 例もあれは

た専切中

如子の世ありてはまのひらひら
 ちよとてまをさ
 笑むと要の字とあふ
 ありさうや
 ありとい
 疾
 よ
 ありも
 さる
 あり
 居るあり
 のえ日の激云か
 実であつて西田
 巨と扱て居るあり
 住来居るあり
 君の都つて人同が多い
 次へ

三首依せ奥不実と名取
 たるありもを理するねど願はと
 遠くをまをの便にうつるは
 驚
 ろく
 幸
 あり
 まのねの
 首尾の又とあらぬ
 是れ三首
 のこと要の字と書引とあ
 の遠慮をを沖法の外に多くて
 願はるる若男と名取してある
 かつて名をなせ候時が様
 是れをわを名と書引とあ
 互
 ひふ
 上へ何の
 其の換り急ぐ
 要及のぬ法者
 返つて候りとい



あつねが次へ
 優了は河を
 のるべし
 必正の坊合

うき退治男の太刀
 まをよとをを縁
 さねん



あつねが次へ
 必正の坊合
 優了は河を
 のるべし
 うき退治男の太刀
 まをよとをを縁
 さねん
 東の隅りゆ
 市走
 足とにじし横よ
 勢のとまひと要へ例
 しろそふて受天被
 さんとのけどもいッ
 板橋の
 勢
 の人の来ぬ肉と又も
 まをよと振振よ
 カの櫛とふさ

方信社中

七

痛くさきほしのもやうなる拙者の痛も
 あひまう
 まの
 温泉の眼痛みさくらの事しやう成程



襦きりふりませう
 取もやひ小座ふらうて
 一秋入で且上らら
 と推あうらる眼
 抽あく押へま
 方之眼
 面月



温泉の眼痛みさくらの事しやう成程
 拙者の痛もあひまう
 まの
 温泉の眼痛みさくらの事しやう成程

〆あつたねのち道由異分 強く服とちりちり仕向の如く小會々
 執ねと排との間に止 如何事とあつたねの如く仕向の如く小會々
 け場い逃匿も元より 小會々仕向の如く仕向の如く小會々
 曲けとのあゆま 小會々仕向の如く仕向の如く小會々
 〆〆〆 要自今宵のあつたね 仕向の如く仕向の如く小會々
 悔めど今日の返りてあつたねの如く仕向の如く小會々
 〆〆〆 由旅而云 仕向の如く仕向の如く小會々
 〆〆〆 〆〆〆 仕向の如く仕向の如く小會々
 〆〆〆 〆〆〆 仕向の如く仕向の如く小會々



東京區分繪圖全

鹿兒島紀事

六冊

命之養生善惡鏡全

島田郎梅雨日記

五編 大尾

珍寶々都々一 出牙扁

彩色八小本 數品

御所櫻梅松録 上齋 仇優忠臣藏折恋

大功記銘々傳 丹舟新板双入類品

龜錦繪問屋

熱草區五町十二番地
 出願人 網島龜吉





芳川俊雄関
岡本勘造終
櫻齋房種画

初編下

2690
3





今日頃川へ出ませし
先初後不で傍をさが密
以倍の吐一の通り幾程か
彼不ふあると云えんて
通せんがふあまらま
是れを考ぐまに幾程か
腰刀と申せよ要と互ひ
ふ云合世人も死に心も
首尾せんめあ計畧ら
暗き奴らまうよや移
多死不
ゆせま
場豆ホ

目拍のら
自決らぬ
唯
えやふひ
とて
業
は
次
の
石



世の人々が
なる洋判とるう
要と共ふ酒所へ幾程か
瓦田の番をゆく高地へ
疑然と云えんめあ
疑ん晴窓と
生むるま
屢々き
む風候
我所とら
鬼由南由
ひふ事と



う頃川へ
供せ家
後の菓
馬一人
次へ

明船とやう
 横投せんと次の
 間の空をへま
 りとつらつと
 と細月をあけて
 龍火と引き
 藤のまなと
 かえに股を
 夕潮の夜果を
 面わしを自ら
 市の中へ
 静うふと
 するの二人の髪と



懐と君が金か
 恐ろしく怖
 せしめ
 とんが
 盗行とる
 ちつ又眠
 らんと
 一
 の危
 ねえ
 盗行とる
 ちつ又眠
 らんと
 一
 の危

備切の
 桑の髪
 女も熱
 申す
 起す
 此殊
 由
 此殊
 申す
 起す
 此殊



彼ら
 盗行とる
 ちつ又眠
 らんと
 一
 の危

何ぶと被い白波出

受差中一席下とそそく
其のるの藤子と静
小押のつゝ入る換子小
家後の登りうき密と
源座を逃ぬーカウ
とり用打とあめて櫻ふた

さく後のはらうかづい後面段中
面とくは曲おもて装せとくかけりるま
物装の衣裳えへる履ます直腹の白く知い法
盗るらねどまの時ゆり毒合せう先おの逃す捕利
とほこれど是ハ我候の身にくの大事の怖不
何候のあらわらん承て押へ下柄合せと日横世い重送る



○氏様
果と
何と
御届明治十二年二月三日
深川富岡門前丁三番地
編輯人岡本勲造

東京區分繪圖全

豊兒島記事 六冊

命之養生書慈鏡全

島田郎梅雨日記 五編
大尾

珍寶々都々一 牙五編
板 粉色入小本 數品

御所櫻梅松録 十編
仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊
新板双六類品

龜地本問屋

豐川區下馬丁七番地
編輯人 岡本勲造
東京區五町十二番地
出版人 網島龜吉





其名も高橋
毒婦の小傳

東京

奇聞

芳川俊雄園

園女勲造撰

櫻富房繪



14
2690
1-3